

<全体分析>

試験時間 75 分

解答形式

記述・論述・描図・選択・マーク

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

問題の分量はやや減少し、昨年のような難問は出題されなかった。

出題の特徴や昨年との変更点

全問とも解答を記述する形式であり、一部には計算の途中経過を書く設問もあった。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	範囲	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
〔Ⅰ〕	問形式 (記述・ 選択)	力学 (摩擦のある 斜面上での物 体の運動)	物理	斜面上で、重力、摩擦力及びばねの弾性力がはたらく物体の運動を考えさせる問題であった。摩擦力のはたらく向きに注意して、力のつり合い式、運動方程式などを立式する必要がある。	標準
〔Ⅱ〕	問形式 (記述・ 選択)	電磁気 (自己誘導・相 互誘導)	物理	ソレノイドコイルについて、自己誘導、相互誘導を扱った問題であった。磁束の定義を正しく理解し、問われているコイルを貫く磁束を、面積に注意して求める必要がある。	標準
〔Ⅲ〕	問形式・ 空所補充 (記述・ 選択)	波動 (光の干渉)	物理	ニュートンリングによる光の干渉を扱った典型的な問題であった。図3で、空気層の厚さを求める際には、(1)の方法を応用すれば良い。	やや易

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

広い範囲をまんべんなく学習し、物理量や物理法則の意味するものを正しく理解するように努めることが大切である。

入試問題の演習を行い、計算力を高めておけばよいだろう。